

小学校「外国語活動」における英語教育はどうあるべきか

—効果的な指導法と教材の開発に向けて—

長谷川修治^[1] 植草学園大学発達教育学

What is Appropriate English Education in Elementary School “Foreign Language Activities”?:
Toward the Development of an Effective Teaching Method and Corresponding Materials

Shuji HASEGAWA Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University

本研究の目的は、小学校5・6年生にとって記憶に残る効果的な英語の指導法と教材の開発に向けて文献調査を行い、最終的に望ましい教材はどうあるべきかを考察することであった。そのため、報道、定期刊行物、書籍、論文等の活字媒体から情報を収集し分析した。結果から、以下のことが明らかとなった。(1)「外国語活動」では文部科学省が作成した共通教材が教科書のように使用され、ICT機器が活用されている。(2)小学校時代に「英語が好きではなかった」という中学校1年生が約3分の1いる。(3)上記共通教材と中学校1年生用英語教科書とは関連が深い。(4)小学校ではゲームなどが中心となる楽しさ優先の活動が行われるため、中学校では「勉強としての英語授業には抵抗がある」という現象が生まれる。(5)記憶に残すための「繰り返し」では、学習者に抵抗なく能動的に行わせる工夫が必要となる。以上の結果は、英語教材開発の貴重な資料になると考えられた。

キーワード：外国語活動、英語教育、指導法、教材、記憶

In order to develop an effective memory-driven teaching method and corresponding teaching materials for elementary school 5th and 6th grade English learners, the purpose of this study was to discuss the relevant matters through a study of the literature. To complete the study, reports, periodicals, books, and papers were collected and analyzed. The results revealed the following: (1) In “Foreign language activities,” optional teaching materials compiled by Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology have been utilized in the same way as compulsory textbooks, along with ICT equipment. (2) Approximately one third of junior high school 1st year students who have experienced English education in their elementary schools say that they disliked the English lessons. (3) The above-mentioned optional teaching materials are closely related to authorized English textbooks for junior high school 1st year students. (4) Enjoyable English activities, mainly using games, cause the students to resist the formal academic learning introduced in their junior high school 1st year English classes. (5) Repetition employed in memorization needs some kind of device to encourage the learners to perform it. These findings were thought to be an invaluable resource for the development of English teaching materials.

Keywords: Foreign language activities, English education, Teaching method, Teaching materials, Memory

[1] 著者連絡先：長谷川修治

1. はじめに

2011年4月より、小学校5・6年生を対象に年間35単位時間ずつ、英語を取り扱うことを原則とした「外国語活動」が実施されることになった。外国語活動の「目標」は、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」¹⁾ ことにある。しかし、外国語（英語）活動の教科書はなく、使用する義務のない共通教材として『英語ノート』²⁾（2012年度からは改訂された『Hi, friends!』³⁾）が配布され、実際の指導は現場に委ねられている。

小学校における英語教育の課題として、久埜⁴⁾ は以下の7点をあげている。それは、①指導者の確保と養成、②指導目標の設定、③指導題材の選択と指導方法、④教材教具の開発、⑤電子機器の活用、⑥日本語が母語でない子ども、学習障害をもつ子どもなど、学習者の抱える問題への対応、⑦評価と動機づけ、である。これらの課題のうち特に③の「指導方法」について、長谷川⁵⁾ および安藤⁶⁾ は、それぞれ独自の視点から文献調査を行い、考察した結果を報告した。

長谷川⁵⁾ は、子どもの発達段階に注目し、「9歳の壁」以降の子どもは自意識が芽生え、「分析が得意、論理的、形式ばる、秩序立つ、ことば重視、抽象的、順序が大事、現実に根ざす」という傾向⁷⁾ があることを確認した。そのため、小学校5・6年生対象の「外国語活動」は、「歌・踊り・ゲーム」を中心とした楽しさ優先の「活動」よりも、本来、学校で行う「授業としての英語の学習」のほうが妥当であると考えた。そして、「小学校の授業」で「言語教育」を行うという視点を持って、子どもの知的好奇心を喚起できる指導法が適切であるとの結論に至った。

安藤⁶⁾ は、発達心理学の観点から、小学生のための効果的な英語の学習方法を検討し、作業記憶（working memory）に注目した試論を発表した。作業記憶では、適切に注意の配分をする「注意制御」を行いながら、必要な情報をすぐに使える状態に「貯蔵」し、その情報を適宜使用して思考・判断する「情報処理」が行われる。安藤⁶⁾ の提案する指導

法は、学習者が日本語と英語の対になった言語刺激を聞いた後、学習項目となる語句や文等を、記憶に残すための「沈黙の時間」を挟んで復唱することを特徴とする。

これまで多くの小学校では、「ゲームや歌を用いて、児童の興味を喚起し、視覚に訴えたり、動作を交えたりして、繰り返しを多用し、英語の音声に自然に触れることができるような活動」⁸⁾（下線は筆者）が実践されてきた。しかし、このような活動では、児童は音を聞き発声はしていても、ただ真似たり繰り返し「言う」だけで⁹⁾、学習事項がどの程度記憶に残っているかは疑問である（白畑¹⁰⁾、山田¹¹⁾を参照）。そのため長谷川・安藤¹²⁾ では、安藤⁶⁾ の提案する作業記憶を活用した指導法による「記憶」の効果を、実際に実験によって検証した。

英単語の記憶に関する検証実験の結果は、指導者によるモデル提示の直後に復唱する従来の方法と、「沈黙の時間」を挟んで復唱する新しい方法とで、その効果はどちらが優位であるとは言い難いという結論となった。そこで本研究は、その検証結果に基づき、記憶に残る効果の高い指導法と教材の開発に向けて、再度、異なる視点から文献調査を行い、最終的に望ましい教材はどうあるべきかを考えることにした。

2. 研究の目的

小学校5・6年生が対象となる「外国語活動」において、子どもの発達段階を考慮した、記憶に残る効果の高い指導法と教材の開発を行うため、再度、文献調査を実施し、最終的に望ましい教材はどうあるべきかを考える。

3. 研究の方法

上記の目的を遂行するため、報道、定期刊行物、書籍、論文等の活字媒体から情報を収集し分析して考察する。

4. 結果と考察

4.1 外国語活動に関わる教員の意識

2010年度にベネッセ教育研究開発センターが全国の公立小学校教員(同一小学校の教務主任および5・6年の学級担任1名)を対象に実施した「第2回小学校英語に関する基本調査(教員調査)」¹³⁾から、小学校での英語教育に対する教員の意識を見ることにする。2010年度は、2011年度から実施される新学習指導要領への移行期間にあたり、「第5学年及び第6学年においては、総合的な学習の時間の授業時数を各学年ごとに35単位時間まで外国語活動に充てること」¹⁴⁾。これにより、2010年度ではすでに86.5%が教育課程上で「外国語活動」として英語教育を実施している。そして、99.6%の学校が外国語(あるいは英語)活動を実施している中で、高学年では「35時間」実施が72.7%、「36時間以上」が4.3%と増加しており、一方で、低・中学年の実施率は低下しているという特徴がある。本研究の中心テーマとなる教材開発に関係すると考えられる教員の意識を、2010年度の調査結果からまとめると以下になる。同調査では、2006年度に実施された「第1回調査」との比較も行われている。

- ① 外国語(英語)活動の指導者は、ほぼすべての学校で「学級担任」が授業に関わるようになった(86.8%→97.5%)。中心となる指導者も「外国語指導助手(ALT, AETなど)」(60.1%→25.6%)から「学級担任」(28.2%→66.6%)へと移っている。ただし、授業はティームティーチング(TT)で行われることも多く、ALTが果たす役割は大きい。
- ② 外国語(英語)活動の課題は、「教材の開発や準備のための時間」の確保57.9%、「ALTなどの外部協力者との打ち合せの時間」の確保39.7%、「指導する教員の英語力」33.6%が上位にあがっている。
- ③ 外国語(英語)活動の内容は、「英語のあいさつ」98.7%、「ゲーム」98.5%、「英語の歌やチャンツ」91.9%、「会話練習」87.7%、「発音練習」82.9%、「クイズ」72.3%、「外国の習慣、考え方、文化の紹介」60.8%、「インタ

ビュー」50.2%が上位になっている。一方、「英語の文字や文を読むこと」29.9%、「英語の文字や文を書くこと」16.5%は、学年による差が大きく、前者は、5年生19.6%に対し6年生36.4%、後者は、5年生9.8%に対し6年生21.24%で、いずれも6年生になると増える。

- ④ 外国語(英語)活動で使用される教材は、「文部科学省が作成した『英語ノート』」89.6%、「ALTなどの外部人材・機関が制作した教材」50.8%、「文部科学省が作成した『英語ノート』デジタル版」49.1%が上位3種である。次いで、「学級担任が独自に制作した教材」41.7%であり、「市販の教材」も26.6%使用されている。
- ⑤ 外国語(英語)活動の設備、機器、環境は、「CDプレーヤー」80.7%、「パソコン」56.9%、「電子黒板」35.9%、「プロジェクター」34.0%など、多様なICT機器が活用されている。
- ⑥ 外国語(英語)活動の指導上必要と感じる研修は、「指導法(歌、チャンツ、ゲームの進め方など)」87.8%、「英語力(クラスルームイングリッシュなど)」60.5%、「教材作成」47.3%などが上位にあがっている。

以上から明らかとなったことは、①外国語(英語)活動の指導者の中心は、「学級担任」であり、②「教材の開発や準備のための時間」の確保が課題となっているということである。③外国語(英語)活動の内容は、「歌・踊り・ゲーム」のうち、「歌(・チャンツ)」と「ゲーム」が上位にあり、「英語のあいさつ」「会話練習」「発音練習」などといった英語の音声に重点を置いた活動が中心である。一方で、英語の文字の読み書きも6年生になると増加する。④外国語(英語)活動で使用される教材は、「文部科学省が作成した『英語ノート』」が圧倒的に多く、そのデジタル版も使用されている。同時に、学級担任も独自の教材作成をしたり、市販教材に依存する様子もうかがえる。⑤外国語(英語)活動の設備、機器、環境は、「CDプレーヤー」「パソコン」「電子黒板」「プロジェクター」などICT機器が活用されている。⑥研修として外国語(英語)活動の指導上必要と感じるのは、「指導法(歌、チャンツ、ゲームの進め方など)」「英語力(クラスルームイングリッシュな

ど)」「教材作成」についてのものである。

文部科学省が2009年度に小学校児童と教員を対象として行った調査結果である『「英語教育改善のための調査研究事業に関するアンケート調査」結果について』¹⁵⁾から、上記ベネッセ教育研究開発センターの調査結果と重なる部分に「外国語（英語）活動で使用する教材」がある。文部科学省の調査においても、『英語ノート』が72.4%で最も多く、次いで「ALTなどの外部人材・機関が制作した教材」56.9%である。このような結果からも、使用する義務のない共通教材とはいえ『英語ノート』（2012年度からは改訂された『Hi, friends!』）が「外国語（英語）活動の教科書」のような存在になっていることがわかる。

4.2 児童の意識

2011年度にベネッセ教育研究開発センターが全国の中学校1年生およびその母親を対象に実施した「小・中学校の英語教育に関する調査・速報版」¹⁶⁾を基に、小学校での英語教育に対する児童の意識を、中学1年生の視点から見ることにする。特に、本研究の中心テーマとなる教材開発に関係すると考えられる部分をまとめると以下ようになる。

- ① 小学校6年生の時に、英語の授業や活動があったと答えた生徒（回答者全体の55.6%）のうち、約3分の2（62.9%）の生徒が「英語が好きだった」（「(とても+まあ)そう思う」と答えている。好きだった理由としては(複数回答)、「授業が楽しかったから」が最も多く73.3%、次いで「もともと興味があったから」が30.2%である。
- ② 小学校6年生の時に、英語の授業や活動があったと答えた生徒（回答者全体の55.6%）のうち、36.2%の生徒が「英語が好きではなかった」（「(あまり+まったく)英語が好きではなかった」と答えている。好きではなかった理由としては(複数回答)、「もともと興味がなかったから」が最も多く56.0%、次いで「授業がつまらなかったから」が31.4%、「授業が難しかったから」が21.4%である。
- ③ 小学校のいずれかの学年で英語の授業や活動があったと答えた生徒で、「小学校の英語活動

で身についたと思うこと」(複数回答)は、「英語を聞くこと」が最も多く50.8%、これに「英語の音やリズムに慣れたこと」41.2%、「外国の人と接することに慣れたこと」35.9%が続く。

- ④ 小学校のいずれかの学年で英語の授業や活動があったと答えた生徒で、「中学校で役立つと思うもの」(複数回答)は、「アルファベットを書くこと」41.0%、「アルファベットを読むこと」40.8%の2項目の回答が多く、これに「英語での簡単な会話」34.4%が続く。
- ⑤ 小学校のいずれかの学年で英語の授業や活動があったと答えた生徒で、「小学校卒業までにやっておきたかったこと」(複数回答)は、「英単語を書くこと」が最も多く33.1%、これに「英語での簡単な会話」32.8%が続く。以下、「英単語を読むこと」26.9%、「英語の文を書くこと」26.7%、「発音の練習」26.3%、「文法(文のルール)の学習」25.5%、「英語の文を読むこと」24.3%、「アルファベットを書くこと」21.4%である。全般的には、「英単語や英文の読み・書き」が上位を占めている。

以上から明らかとなったことは、①「英語が好きだった」という生徒が「約3分の2」いるのに対し、②「英語が好きではなかった」という生徒が「約3分の1」いるということである。小学校卒業時までにすでにこれだけの「英語嫌い」が存在するというのは驚きである。「英語が好きだった」理由は「授業が楽しかったから」というのは納得できても、「英語が好きではなかった」理由は「もともと興味がなかったから」というのには疑問が残る。③「小学校の英語活動で身についたと思うこと」は、「英語を聞くこと」すなわちリスニング力である。④「中学校で役立つと思うもの」は、「アルファベットの読み書き」である。⑤「小学校卒業までにやっておきたかったこと」は、「英単語や英文の読み書き」や「英語での簡単な会話」である。

文部科学省が2009年度に小学校児童と教員を対象として行った調査結果である『「英語教育改善のための調査研究事業に関するアンケート調査」結果について』¹⁵⁾から、上記ベネッセ教育研究開発センターの調査結果と重なる部分を抜き出すと、6年生では以

下ようになる。文部科学省の調査で「英語の授業が好き」（好き+どちらかといえば好き）な児童は63.2%であり、ベネッセ教育研究開発センターの調査結果（「英語が好きだった」割合）とほぼ等しい。一方で、「英語の授業を理解している児童」（理解している+どちらかといえば理解している）は57.8%である。最も多くの児童（6年生）が楽しいと思っていることは「英語のゲームをすること」で88.8%、続いて「外国のことについて学ぶこと」71.3%、「英語と日本語の違いを知ること」66.0%、「英語で友達と会話をする事」63.2%である。「英語が使えるようになりたいと思っている児童」は83.9%であり、「英語が大切だと思っている児童」は90.1%である。したがって、上記のベネッセ教育研究開発センターの調査結果における「英語が好きではなかった」理由が「もともと興味がなかったから」ということには、やはり疑問が残ることになる。児童はほぼ誰でも、潜在的には「英語ができるようになりたい」という意識を持っているのではないかと考えられる。

4.3 実際の教材

それでは、実際の教材を見ることにする。まず、先に言及した「外国語活動に関わる教員の意識」に関する調査結果から、使用する義務のない共通教材とはいえ『英語ノート』（2012年度からは改訂された『Hi, friends!』）が「外国語（英語）活動の教科書」のような存在になっているため、現在使用されている『Hi, friends!』の内容を観察した。

『Hi, friends!』は『英語ノート』と同様に、「1」と「2」があり、前者が5年生用、後者が6年生用である。ページ数は『Hi, friends!』の方が『英語ノート』より3割少ない。文部科学省のホームページには、「Hi, friends!」関連資料¹⁷⁾が用意されており、「Hi, friends! 1」を活用した年間指導計画例および「Hi, friends! 2」を活用した年間指導計画例を参照できる。

まず、年間指導計画の全体像からわかるのは、『Hi, friends! 1』は9つのLesson、『Hi, friends! 2』は8つのLessonで構成されているということである。それぞれのLessonに配当された時数は、『Hi, friends! 1』では2～5時間、『Hi, friends! 2』では4～6時間となっている。扱われている題材や表現に

ついては、先述した文部科学省のホームページの「Hi, friends!」関連資料に、「Hi, friends!」と中学校教科書との系統表（埼玉県教育委員会作成）が用意されており、小中連携という点でも参考になる。この系統表を見ると、『Hi, friends!』の「1」と「2」で登場する題材や表現が、現在、中学校で使用されている英語教科書6種のどれにおいても、1年生用教科書と関係が深いことがわかる。このような点から、『Hi, friends! 1』と『Hi, friends! 2』は、中学校英語を見据えて入念に作成されていると言える。

次に、上記関連資料を基に、『Hi, friends!』「1」および「2」の詳細について検討する。『Hi, friends!』は「1」でも「2」でも4時間を配当されたLessonが最も多い。そこで、『Hi, friends!』の「1」と「2」から、紙幅の都合上サンプルとして、どちらも教材の中ほどに位置する、前者ではLesson 5、後者ではLesson 4を表1に抜き出して考察する。表1の【 】内には「Hi, friends!」冊子に記載されている活動が表示されているが、5年生でも6年生でも、【Let's Listen】でリスニング（聞く）、【Let's Chant】でチャンツ（歌）、【Let's Play】で遊び的活動、【Activity】で「聞く・話す」活動を行うという構成になっている。何よりも驚くのは、【Let's Chant】とともに「～ゲーム」（網掛け部分）という活動が多用されていることである。子供の発達段階から見た場合、批判のある「歌・踊り・ゲーム」¹⁸⁾のうち「歌」と「ゲーム」が『Hi, friends!』の「1」と「2」の中心を占めることになる。「踊り」については、『Hi, friends! 1』のLesson 2の【Let's Listen】という活動で、「Hello Song」という歌を「振り」を付けて歌うことになっている。『Hi, friends! 1』のデジタル版には、この「歌」と「踊り」が音声と一部動画で示されている。子供の発達段階から見た場合、入門期の英語指導とはいえ「歌・踊り・ゲーム」が小学校5・6年生にとって適切かどうかは再考の余地がある。

4.4 小学校英語の功罪

中学校1年生での学習事項を見据えて入念に作成されている小学校英語の共通教材『Hi, friends!』にも意外な「落とし穴」がある。まず、以下に大塚・胡子¹⁹⁾より、中学校教師から見た小学校英語のメ

表1 『Hi, friends!』「1」および「2」で行われる活動の内容

活動例 (◆:目標, 【 】:“Hi, friends!” 冊子に記載されている活動をさす)			
“Hi, friends! 1” (5年生)	“Hi, friends! 2” (6年生)		
Lesson 5 What do you like? ④ 色/形	Lesson 4 Turn right. ④ 建物/道案内		
1	◆日本語と英語の音の違いに気付き、色や形の言い方を知る。 ○色を探そう。 【Let's Listen 1】何番のTシャツか、考えよう。 【Let's Listen 2】だれが何番のTシャツが好きか、○に番号を書こう。 ○ポインティングゲーム①② 【Let's Chant】“What color do you like?”	1	◆町中にある様々な建物などの言い方を知り、日本語との違いに気付くとともに、道案内の言い方を知る。 ○What's this? ゲーム 【Let's Play】おはじきゲーム ○ミッシングゲーム ○どこに行くのかな? ○サイモンセズゲーム
2	◆色や形の言い方に慣れ親しみ、好きなものは何かを尋ねる表現を知る。 ○ポインティングゲーム③④ ○ミッシングゲーム 【Let's Chant】“What color do you like?” ○ラッキーカードゲーム	2	◆建物などの言い方や、目的地への行き方を尋ねたり言ったりする表現に慣れ親しむ。 ○ビンゴゲーム 【Let's Chant】“Where is the station?” ○Turn right. ゲーム 【Let's Listen】どこに行くのかを書こう。 ○仲間探しゲーム
3	◆色や形の言い方や、好きなものは何かを尋ねる表現に慣れ親しむ。 【Let's Chant】“What color do you like?” 【Let's Listen 3】さくらとたくのTシャツは何番か、考えよう。 【Let's Play】友だちにTシャツを作ろう。 ○カテゴリー分け 【Let's Chant】“What color do you like?”	3	◆目的地への行き方を尋ねたり言ったりする表現に慣れ親しむ。 【Let's Chant】“Where is the station?” ○どこにあるのかな? 【Activity】ペアで情報を伝え合いながら、同じ町を作ろう。
4	◆好きなものについて、積極的に尋ねたり答えたりしようとする。 【Let's Chant】“What color do you like?” ○ラッキーカードゲーム 【Activity】友だちに何かが好きか、インタビューしよう。 ○他己紹介をしよう。	4	◆相手意識をもって目的地への行き方を尋ねたり、わかりやすく道案内したりしようとする。 【Let's Chant】“Where is the station?” ○友達を案内しよう① ○友達を案内しよう②

“Hi, friends!” 関連資料¹⁷⁾より

リットとデメリットを引用する。

メリット

- ① あいさつの仕方を理解しており、きちんとできている。
- ② 数字、曜日、天気、月を言える。(知っている語彙の数が多い)
- ③ 簡単な会話を知っているなので、最初からQ&A活動をすることができる。
- ④ ALTが指導していた小学校の場合は発音をネイティブらしく発音させても抵抗なく発音する。
- ⑤ 授業で英語を使用するグループ活動に意欲的に参加できる。
- ⑥ 英語の指示を理解できることが多い。(特にALTがメインで指導した小学校)
- ⑦ 小学校でALTと接してきた生徒達は、ALTとの接し方に慣れている。

- ⑧ 外国語活動を経験してきたので、中学校の英語授業に抵抗感が少ない。

デメリット

- ① 英語授業に対する新鮮味がないので、ワクワクドキドキ感がない。
- ② 中学校で授業を始める前から英語嫌いがいる。
- ③ ゲームなど楽しい活動をしてきたので、勉強としての英語授業には抵抗がある。
- ④ 小学校時代に間違えて覚えてきたことが、なかなか直らないことがある。

上記の「メリット」の中でも、特に②に示された「知っている語彙の数が多い」ということは、小中高大から場合によっては社会に出てまで続く英語学習という点で好ましいことである(「語彙」の重要性については、長谷川・中條・西垣²⁰⁾²¹⁾²²⁾を参照)。一

方で、「デメリット」は深刻である。①は、ある意味で止むを得ないかもしれないが、中学校の授業を工夫することで対応できる可能性もある。②は、先述したように、2011年度に実施したベネッセ教育研究開発センターの意識調査で、小学校6年生の時に、英語の授業や活動があったと答えた中学校1年生のうち、36.2%が「英語が好きではなかった」と答えていることから頷ける。④は、「外国語(英語)活動」は、あくまで英語に慣れるための「活動」であって「授業」ではないので、児童の間違いをあえて訂正しないという指導法に起因すると考えられる。特に深刻な問題は③である。小学校ではゲームなどが中心となる楽しさ優先の活動を行ってきたため、その習慣が抜けきれずに「勉強としての英語授業には抵抗がある」のである。その結果、中2において学力低下が起こる原因を増測²³⁾は以下のように述べている。

中学入学時に生徒が身につけている経験値を、①「コミュニケーション活動」、②「文法」「文字と音のルール」、③「家庭学習」の3点で数直線上においてみると、まず①は大きくプラスだ。②は体験的に獲得してきたものがあるとはいえ、①に比べればほとんどゼロに近い。そして③家庭学習は、小学校では授業だけで十分楽しく学ぶことができたという成功体験からの脱却が必要な分、むしろマイナスからのスタートなのだ。

つまり、楽しさ優先の小学校英語の「付け」が、マイナスの副産物として中学校英語に影響を与えるというのである。同様の指摘は、山本²⁴⁾にも見られる。高田²⁵⁾も同様の報告をしており、このような現象が起こる原因を、BICS (Basic Interpersonal Communication Skills) 中心の言語学習からCALP (Cognitive Academic Language Proficiency) の要素を含んだ学習への移行が円滑にできないことによるものとしている。小学校英語を効果的に行う教材の開発に当たっては、このような点も考慮する必要があると考えられる。

4.5 記憶に残る教材開発へ向けて

人間の「記憶」は急速に減衰するものである。よ

く知られたエビングハウス (Ebbinghaus)²⁶⁾ による無意味綴り (nonsense syllable) を使用した記憶の実験では、「わずか19分で40%以上が忘却され、1日、2日が経てば、約30%しか覚えていない」²⁷⁾ という結果が示されている。

情報処理モデルでは、それまで「記銘」・「保持」・「想起」からなるとされてきた記憶の過程を、「符号化/コード化 (encoding)」・「貯蔵 (storage)」・「検索 (retrieval)」からなる一連の情報処理過程とみなす²⁸⁾。この一連の記憶の過程のうち、特に第1番目の「記銘」ないしは「符号化/コード化 (encoding)」と呼ばれる段階で、これまでの英語指導法では、「記憶」に残すという視点が欠けていたため、学習者に提示した単語等の復唱を、指導者によるモデル提示の直後にオウム返しで行わせていた。これに対し、長谷川・安藤²⁹⁾ は、記憶の効果を高めるために、学習者は指導者による単語等の例示後に「沈黙の時間」を挟んで復唱するという指導法を提案し検証した。しかし、その結果は従来の方法と優劣のつけ難いものであったために、指導者・学習者双方において新しい指導法への習熟を図ることを含め、改善の余地が残されている。

一般に、「学習の基本」である「繰り返し」は、引き続いてなされる繰り返し (massed repetition) より、間隔を置いて分散された繰り返し (distributed repetition) のほうが効果的であると言われる²⁹⁾。この分散効果を、時間の経過にしたがって減衰してゆく記憶を喚起し定着を図るという方向で利用することもできる。たとえば、「Spaced repetition」という方法がそれである (詳細はBaddeley³⁰⁾, Pavlik and Anderson³¹⁾ を参照)。この方法はパソコンを使用して単語の記憶などをすることに応用ができ、発音や綴りや意味などについて提示する質問に学習者が答える形式をとる。学習者が答えることのできた質問は次に提示されるまでの間隔が長くなり、答えられなかった質問は短くなる。この調整はコンピュータ・プログラムが判断して行い、一定の記憶レベルが達成されたと判断された段階で終了となる。すでに、コンピュータ・ソフトも個々の用途に応じたものが複数開発されている。

竹蓋³²⁾ は、学習事項を記憶に残して利用可能とするためには、「聞くこと、話すことを中心」とする

場合も、「読むこと及び書くこと」が密接に関連していることを報告している。「3ラウンド・システム」と呼ばれるこの指導法では、リスニング能力の向上だけに限った場合でも、聞き取った英文の「ディクテーション」や「自己添削」に加え、「頭のなかで（声をたてずに）聞いた文を復唱する」³³⁾ という学習作業が行われる。いわば人間の五感と認知的操作をフル活用して記憶に刻み込む「記録」の部分に重点が置かれている。さらにこの指導法は「3ラウンド」という呼称からもわかるとおり、1つのパッセージの学習を3回行う。その際に、たとえば10種のパッセージを学習する場合、1～10まで一度学習を行ったうえで、再度、1～10までのパッセージを学習し、再度また1～10までのパッセージを学習するというように、1～10までを3セット（ラウンド）行うのである。1セット（ラウンド）、2セット（ラウンド）、3セット（ラウンド）、と順を追うごとに、設問の難易度が上がってゆくシステムとなっている。これも、ある意味で分散学習の応用と考えることができる。すでに教材化も為されており、パソコンやCDなどを使用した学習が可能である。

この節で取り上げた、「沈黙の時間」を挟んで復唱する指導法¹²⁾，“Spaced repetition”，および「3ラウンド・システム」は、いずれも学習事項を「記憶」に残すことを重視したものである。そのキーワードとなるものは、いずれも「繰り返し」である。特に「3ラウンド・システム」は、一見単調になりがちな「繰り返し」を、様々な学習作業を組み合わせることにより、学習者に抵抗なく能動的に行わせる工夫をしている。このような点も、小学生向けの効果的な教材開発のためには、参考にすべき重要な事項であると考えられる。

5. まとめ

2011年4月より、小学校5・6年生を対象に年間35単位時間ずつ、英語を取り扱うことを原則とした「外国語活動」が実施されることになった。しかしながら、使用義務のない「共通教材」はあるものの「教科書」は存在しない。また、これまで実践されてきた「歌・踊り・ゲーム」を中心とした「楽しさ優

先」の指導法は、子どもの発達段階から見た場合、自意識が芽生え、論理的・抽象的思考が可能な小学校5・6年生には適切と言えるものではなかった。さらに、機械的な「繰り返し」を多用するだけの指導法では、学習事項がどれだけ記憶に残っているかも疑問であった。これに対し、長谷川・安藤¹²⁾は、作業記憶に注目し、指導者によるモデル提示の直後に復唱する従来の方法と、「沈黙の時間」を挟んで復唱する新しい方法とで比較検証を行った。しかし、その結果はどちらが優位であるとは言い難いという結論となった。そこで本研究では、再度、小学校5・6年生にとって記憶に残る効果の高い指導法と教材の開発に向けて文献調査を行い、最終的に望ましい教材はどうあるべきかを考えることを目的とした。そのため、報道、定期刊行物、書籍、論文等の活字媒体から情報を収集し分析して考察した。結果は以下のとおりである。

- (1) 外国語活動に関わる教員の意識から、①外国語（英語）活動の指導者の中心は、「学級担任」であり、②「教材の開発や準備のための時間」の確保が課題となっている。③外国語（英語）活動の内容は、「歌・踊り・ゲーム」のうち、「歌（・チャンツ）」と「ゲーム」が上位にある。英語の音声に重点を置いた活動が中心であるが、英語の文字の読み書きも6年生になると増加する。④教材は、「文部科学省が作成した『英語ノート』」（2012年度からは『Hi, friends!』）が圧倒的に多く、そのデジタル版も使用されている。⑤外国語（英語）活動の設備、機器、環境は、「CDプレーヤー」「パソコン」「電子黒板」「プロジェクター」などICT機器が活用されている。⑥研修は、「指導法（歌、チャンツ、ゲームの進め方など）」への要望が最も多い。
- (2) 児童の意識から、①小学校時代の「英語が好きだった」という中学校1年生が「約3分の2」いるのに対し、②「英語が好きではなかった」という生徒が「約3分の1」いる。（文部科学省の調査では「英語の授業が好き」な6年生の割合が、上記①に示したベネッセ教育研究開発センターの調査結果とほぼ等し

い。)③「小学校の英語活動で身についたと思うこと」は、「英語を聞くこと」である。④「中学校で役立ったと思うもの」は、「アルファベットの読み書き」である。⑤「小学校卒業までにやっておきたかったこと」は、「英単語や英文の読み書き」や「英語での簡単な会話」である。

- (3) 実際の教材から、共通教材『Hi, friends!』の「1」と「2」で登場する題材や表現は、現在、中学校で使用されている1年生用英語教科書6種のどれにおいても関連性が深い。具体的な活動例としては、子供の発達段階から見た場合、批判のある「歌・踊り・ゲーム」¹⁸⁾のうち「歌」と「ゲーム」が『Hi, friends!』の「1」と「2」の中心を占める。
- (4) 小学校英語の功罪から、「メリット」として、中学校1年当初の段階で「知っている語彙の数が多いため、小中高大から場合によっては社会に出てまで続く英語学習という点では好ましい。一方で、深刻な「デメリット」として、小学校ではゲームなどが中心となる楽しさ優先の活動が行われるため、中学校ではその習慣が抜けきれずに「勉強としての英語授業には抵抗がある」という現象が見られる。
- (5) 記憶に残る教材開発へ向けて、考察対象とした「沈黙の時間」を挟んで復唱する指導法¹²⁾，“Spaced repetition”，および「3ラウンド・システム」は、いずれも学習事項を「記憶」に残すことを重視したものである。特に「3ラウンド・システム」は、一見単調になりがちな「繰り返し」を、様々な学習作業を組み合わせることにより、学習者に抵抗なく能動的に行わせる工夫をしている。このような点も、小学生向けの効果的な教材開発のためには、参考にすべき重要事項であると考えられる。

以上の調査および考察結果を基に、本研究の目的である、小学校5・6年生にとって記憶に残る効果の高い英語の指導法と教材の開発に向けて努力したいと考える。そして、教材が出来上がった時点で、再度その効果を検証する予定である。

本研究は、植草学園大学平成24年度共同研究費の助成を受けた研究の一環として行われたものである。

6. 参考文献

- 1) 文部科学省. 小学校学習指導要領 第4章 外国語活動. 小学校学習指導要領解説 外国語活動編. 東洋館出版社. 2008: 34-35 (cf. 34)
- 2) 文部科学省. 英語ノート1, 2. 教育出版株式会社. 2009
- 3) 文部科学省. Hi, friends! 1, 2. 東京書籍株式会社. 2012
- 4) 久埜百合. 小学校英語: 直面する課題. 英語教育. 2011; 60(6): 41
- 5) 長谷川修治. 小学校英語教育における「歌・踊り・ゲーム」の研究. 植草学園大学研究紀要. 2011; 3: 59-68
- 6) 安藤則夫. 作業記憶を活かした英語学習法の構築を目指して(試論) —小学生のための身に付く英語学習方法を考える—. 植草学園大学研究紀要. 2011; 3: 69-78
- 7) 樋口忠彦, 金森強, 國方太司(編). これからの小学校英語—理論と実践—. 研究社. 2005 (cf. 68)
- 8) 東野裕子, 高島秀幸. 小学校外国語活動で求められる活動. 英語教育. 2010; 59(1): 63-65 (cf. 63-64)
- 9) 東野裕子, 高島秀幸. 上記8) (cf. 64)
- 10) 白畑知彦(編著), 若林茂則, 須田孝司. 英語習得の「常識」「非常識」—第二言語習得研究からの検証. 大修館書店. 2004 (cf. 100)
- 11) 山田雄一郎. 日本の英語教育. 岩波書店. 2005 (cf. 173)
- 12) 長谷川修治, 安藤則夫. 小学校英語の効果的な指導法を求めて—作業記憶の活用による記憶効果の検証—. 植草学園大学研究紀要. 2012; 4: 49-58
- 13) ベネッセ教育研究開発センター. 第2回 小学校英語に関する基本調査(教員調査). 2010
<http://benesse.jp/berd/center/open/report/syo_eigo/2010/index.html> (参照 2012. 7. 1)
- 14) 文部科学省. 文部科学省通知20文科初第386号. 2008
<http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1304407_005.pdf#search=%E6%96%87%E9%83%A8%E7%A7%91%>

- E5%AD%A6%E7%9C%81%E9%80%9A%E7%9F%A520
%E6%96%87%E7%A7%91%E5%88%9D%E7%AC%AC
386%E5%8F%B7> (参照 2012. 7. 1)
- 15) 文部科学省. 「英語教育改善のための調査研究事業に関するアンケート調査」結果について. 2010
<http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1299796.htm> (参照 2012. 7. 1)
- 16) ベネッセ教育研究開発センター. 小・中学校の英語教育に関する調査・速報版. 2011
<http://benesse.jp/berd/center/open/report/syochu_eigo/2011/soku/index.html> (参照 2012. 7. 1)
- 17) 文部科学省. “Hi, friends!” 関連資料. 2012
<http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1314837.htm> (参照 2012. 10. 1)
- 18) 鳥飼玖美子. 危うし! 小学校英語. 文芸春秋. 2006
- 19) 大塚謙二, 胡子美由紀. 成功する小中連携! 生徒を英語好きにする入門期の活動55. 明治図書. 2012 (cf. 7)
- 20) 長谷川修治, 中條清美, 西垣知佳子. 大学入試英語問題語彙の難易度と有用性の時代的变化. *JALT Journal*. 2006; 128(2): 115-134
- 21) 長谷川修治, 中條清美, 西垣知佳子. 中高英語検定教科書語彙の実用性の検証. 日本大学生産工学部研究報告B. 2008; 41: 57-89
- 22) 長谷川修治, 中條清美, 西垣知佳子. 日本の英語教育における語彙指導の問題を考える. 植草学園大学研究紀要. 2010; 2: 21-29
- 23) 増渕素子. 「中2ショック」に学ぶ小中連携のカギ. 英語教育. 2012; 61(2): 43
- 24) 山本玲子. 小学校英語を経験した中学生の「自己調整学習」における実証的研究. 第38回 全国英語教育学会 愛知研究大会 発表予稿集. 2012: 70-71
- 25) 高田智子. YLE Startersを用いた小学校英語学習経験者の英語力調査. 関東甲信越英語教育学会紀要. 2008; 22: 1-12
- 26) Ebbinghaus, H. *Über das gedächtnis: Untersuchungen zur experimentellen psychologie*. Duncker und Humboldt. 1885
- 27) 松見法男. 「こころ」から「ことば」を観る. 縫部義憲 (監修), 講座・日本語教育学 第3巻 言語学習の心理. スリーエーネットワーク. 2006: 15-29 (cf. 20)
- 28) 高野陽太郎(編). 認知心理学 2 記憶. 東京大学出版会. 1995 (cf. 12)
- 29) 御領謙, 菊地正, 江草浩幸. 最新 認知心理学への招待—心の働きとしくみを探る—. サイエンス社. 1993 (cf. 122-127)
- 30) Baddeley, A. D. *Human memory: Theory and practice*. Psychology Press. 1997
- 31) Pavlik, P. I. and Anderson, J. R. Using a model to compute the optimal schedule of practice. *Journal of Experimental Psychology: Applied*. 2008; 14(2): 101-117 <<http://www.apa.org/pubs/journals/features/xap142101.pdf>> (参照 2012. 10. 1)
- 32) 竹蓋幸生. ヒアリングの指導システム—効果的な指導と評価の方法—. 研究社出版. 1989 (cf. 128-131)
- 33) 竹蓋幸生. 上記32) (cf. 129)